

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17530500
 研究課題名（和文） 青年期における能動的攻撃性・反応的攻撃性の発達臨床心理学的研究
 研究課題名（英文） Research on the relationship between Proactive-Reactive Aggressiveness and Psychosocial Maladjustment during Adolescence.
 研究代表者
 濱口 佳和 (HAMAGUCHI YOSHIKAZU)
 筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
 研究者番号：20272289

研究成果の概要：

この研究では、青年（中学生～大学生）の攻撃性を、行動傾向ではなく認知、感情、欲求といった内面の特性としてとらえ、能動的攻撃性4特性(仲間支配欲求、攻撃有能感、欲求固執、攻撃肯定評価)、反応的攻撃性3特性(怒り、報復意図、外責的認知)の2領域7特性から成るものとした。そして、①能動的・反応的攻撃性の個人差を測る尺度を作成し(中学、高校、大学)、その信頼性・妥当性が実証され、②人格特性としての能動的・反応的攻撃性が、具体的な他者とのやり取りの場面でのどのような認知・感情を経て他者への攻撃行動を引き起こすのか、その筋道が明らかにされ、③能動的・反応的攻撃性と様々な心理社会的不適応・パーソナリティ障害傾向との関連が解明された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,600,000	0	1,600,000
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	400,000	120,000	520,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,100,000	300,000	3,400,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：青年期 能動的攻撃性 反応的攻撃性 身体的攻撃 関係性攻撃 社会的情報処理 抑うつ パーソナリティ障害

1. 研究開始当初の背景

1980年代の末期に既に北米では、K. Dodgeらによって、児童の反応的・能動的攻撃行動傾向を測定する教師評定用尺度が開発されていた。本研究が開始された2005年頃には、北米ではDodgeらの尺度を用いて、児童を対象に、能動的攻撃・反応的攻撃の2因子説の妥当性、高能動的攻撃児、高反応的攻撃児の社会的情報処理、社会的スキル、仲間関係、

いじめ被害・加害経験などにおける特徴が明らかにされていた。また北米大陸では、いくつかの縦断的研究により、児童期における反応的・能動的攻撃行動傾向が、それぞれ青年期においてどのような心理社会的不適応につながるかが明らかにされ始めていた。しかし、2005年の時点では、国内では濱口が小・中学生を対象として自記式の能動的・反応的攻撃性尺度の作成を試み始めたばかりで、濱

口による学会発表が散見される程度であった。海外においては、当時はまだ能動的攻撃、反応的攻撃の青年用の個人差測定尺度はなく、青年の攻撃性を能動的・反応的攻撃の観点からとらえようとする研究は殆どなかった。現在では米国で青年用の2つの尺度が開発されているが、いずれも行動傾向を測定するもので、本研究のように認知、感情、欲求といった内的側面から攻撃的パーソナリティ傾向を測定する尺度は今もって存在しない。

2. 研究の目的

本研究の目的は大きく以下の3つに集約されている。

(1) 青年期全体にわたる能動的・反応的攻撃性の個人差測定尺度の開発：①研究開始時に既に学会発表レベルで報告されていた中学生用の自記式能動的攻撃性尺度・反応的攻撃性尺度の信頼性・妥当性をさらに検討し、学会誌掲載可能な水準まで向上させること(研究1,2,3)。②①で開発された能動的攻撃性と反応的攻撃性の尺度を一般高校生や少年院在院中の非行青年に実施し、高校生の学校段階でも、信頼性・妥当性があることを検証すること(研究4,5)。③大学生用の能動的・反応的攻撃性尺度の作成と信頼性・妥当性の検討を行うこと(研究6)。

(2) 青年期における能動的・反応的攻撃性、仲間による挑発場面での社会的情報処理、攻撃行動・主張行動の3者間の関連性の検討：人格特性としての能動的・反応的攻撃性が、仲間による侵害場面で青年が行う社会的情報処理にどのように関連し、結果として相手への攻撃行動を引き起こすのか、そのメカニズムを明らかにすること(研究7,8,9)。

(3) 青年期における能動的・反応的攻撃性と様々な心理社会的不適応との関連の検討：抑うつ・対人恐怖といった内在化問題と非行傾向といった外在化問題さらに、境界性パーソナリティ障害傾向、自己愛性パーソナリティ障害傾向と能動的・反応的攻撃性がどのように関連するのかを明らかにすること(研究10,11,12)。

以上の(1)~(3)の目的を明らかにすることにより、我が国の青年の攻撃性の個人差の内面からの客観的測定が可能になり、具体的な仲間とのやり取りの中で攻撃行動を抑制するための指針や心理社会的不適応およびパーソナリティ障害傾向を予防するための指針を得ることができる。

3. 研究の方法

すべての研究が質問紙調査で行われた。研究目的ごとに、質問紙の構成などについて述べる。

(1) 青年期全体にわたる能動的・反応的攻撃

性の個人差測定尺度の開発

①研究1「自記式能動的攻撃性尺度(中学生用)の構成」：自記式能動的攻撃性尺度(中学生用)、中学生用社会的スキル尺度(戸ヶ崎ら,1997)、自己の利益・都合追求尺度(坂西,1994)、教師用能動的攻撃性尺度(Dodge&Coie,1987)。中学1~3年生1,568名。

②研究2「自記式反応的攻撃性尺度(中学生用)尺度の構成」：自記式反応的攻撃性尺度(中学生用)、中学生用攻撃性質問紙(大竹ら,1998)、教師評定反応的攻撃性尺度(Dodge&Coie,1987)。中学1~3年生(1,069名)。

③研究3「中学生の能動的・反応的攻撃性の因子構造の検討」：自記式能動的・反応的攻撃性尺度(中学生用)。中学1~3年生(603名)。

④研究4「自記式能動的・反応的攻撃性尺度(高校生用)の構成」：自記式能動的・反応的攻撃性尺度(高校生用)原版、敵意攻撃インベントリー(秦,1990)、非行接近/抑制尺度(近藤,2004)、青年用多次元共感尺度(登張,2003)、関係性攻撃尺度(櫻井,2003)、向社会的行動尺度(横塚,1989)、青年用自己表明尺度(柴橋,2001)。サンプル1、高校1~3年生587名；サンプル2、高校1~3年生1,294名。全体2,234名。

⑤研究5「能動的・反応的攻撃性における一般高校生と少年院在院生徒の差異」：自記式能動的・反応的攻撃性尺度(高校生用)。高校1~3年生男子308名、少年院在院生男子130名。

⑥研究6「能動的・反応的攻撃性尺度(大学生用)の構成」：自記式能動的・反応的攻撃性尺度(大学生用)原版、一次性サイコパシー尺度(大隈ら,2007)、怒り感情喚起・持続尺度(渡辺・小玉,2001)、情動的共感性尺度(加藤・高木,1980)、Buss-Perry 攻撃性質問紙(安藤ら,1999)、機能的攻撃性尺度(大淵ら,1999)、大学生用攻撃性尺度(磯部・菱沼,2007)。サンプル1、大学生264名；サンプル2、251名；サンプル3、101名。全体616名。

(2) 青年期における能動的・反応的攻撃性、仲間による挑発場面での社会的情報処理、攻撃行動・主張行動の3者間の関連性の検討：

⑦研究7「中学生の能動的・反応的攻撃性と関係性挑発場面における社会的情報処理ならびに応答的行動との関連」：自記式能動的・反応的攻撃性尺度(中学生用)、関係性挑発場面における社会的情報処理・応答的攻撃性質問紙。中学1・2年生397名。

⑧研究8「高校生の能動的・反応的攻撃性と関係性挑発場面における社会的情報処理ならびに応答的行動との関連」：自記式能動的・反応的攻撃性尺度(高校生用)、関係性挑発場面における社会的情報処理・応答的攻撃性質問紙。高校1・2年生310名。

⑨研究9「中学生の能動的・反応的攻撃性と道具的挑発場面における社会的情報処理なら

らびに応答的行動との関連」：自記式能動的・反応的攻撃性尺度(中学生用), 道具的挑発場面における社会的情報処理・応答的攻撃性質問紙. 中学 1・2 年生 303 名.]

(3) 青年期における能動的・反応的攻撃性と様々な心理社会的不適応との関連の検討：

⑩研究 10「中学生の能動的・反応的攻撃性と抑うつならびに非行関連欲求との関連の検討」：自記式能動的・反応的攻撃性尺度(中学生用), 抑うつ尺度(CES-D, 島, 1985), 非行欲求尺度(前田他, 2001). 中学 1~3 年生(603 名)(研究 3 と同一サンプル)

⑪研究 11「大学生の能動的・反応的攻撃性と対人恐怖心性・自己愛傾向との関連の検討」：自記式能動的・反応的攻撃性尺度, 対人恐怖心性—自己愛傾向 2 次元モデル尺度(中山・中谷, 2006). 大学生 354 名.

⑫研究 12「大学生の能動的・反応的攻撃性と境界性パーソナリティ傾向との関連の検討」：自記式能動的・反応的攻撃性尺度, ミロン臨床多軸目録 II 境界性スケール短縮版(井沢他, 1995). 大学生 354 名. (研究 11 と同一サンプル).

4. 研究成果

(1) 青年期全体にわたる能動的・反応的攻撃性の個人差測定尺度の開発：研究 1～研究 6

a. 中学生用尺度の作成 研究 1 では, 中学 1~3 年生 1,568 名を対象に 30 項目からなる自記式能動的攻撃性尺度が作成された. 仲間支配欲求, 攻撃有能感, 攻撃肯定評価, 欲求固執の 4 下位尺度からなり, α 係数は .69 ~ .86, 自己の利益・都合追求尺度とは中程度の正の相関が, 関係維持行動(向社会的行動)とは中程度の負の相関が見られ, また教師評定の能動的攻撃行動傾向とも有意な関連が見られ, 妥当性が確認された.

研究 2 では, 中学 1~3 年生 1,069 名を対象に, 17 項目からなる自記式反応的攻撃性尺度が作成された. 報復意図, 怒り, 外責的認知の 3 下位尺度からなり, α 係数は .60~.84 となった. 中学生用攻撃性質問紙とは中程度~高い正の相関がみられ, 教師評定の反応的攻撃行動傾向とも関連が見られ, 信頼性・妥当性とも確認された.

研究 3 では, 中学 1~3 年生 603 名を対象に, 自記式能動的攻撃性尺度と反応的攻撃性尺度を実施し, 能動的・反応的攻撃性の因子構造が, 共分散構造分析により検討された. その結果, 報復意図と怒りからなる反応的攻撃性と仲間支配欲求と攻撃有能感からなる支配的能動的攻撃性, 欲求固執と攻撃肯定評価からなる利己的能動的攻撃性の 3 因子モデルが最も適合度の高いモデルであることが明らかにされた.

b. 高校生用尺度の作成 研究 4・5

研究 4 では, 中学生用の能動的・反応的攻

撃性尺度を 2,234 名の高校生に実施. 探索的因子分析の結果, 中学と同様の因子構造が再現された. α 係数は攻撃肯定評価のみ .64 と低めだが, 他は .75~.88 と高い信頼性が確認された. 共分散構造分析により高次因子構造を斜交 2 因子モデル(反応的攻撃性 vs 能動的攻撃性)と斜交 3 因子モデル(反応的攻撃性, 支配的能動的攻撃性, 利己的能動的攻撃性)を比較したところ, 後者のモデルのほうが適合度が良好で(Fig. 1), 中学同様能動的・反応的攻撃性は斜交 3 因子モデルで最もよく捕らえられることが明らかにされた.

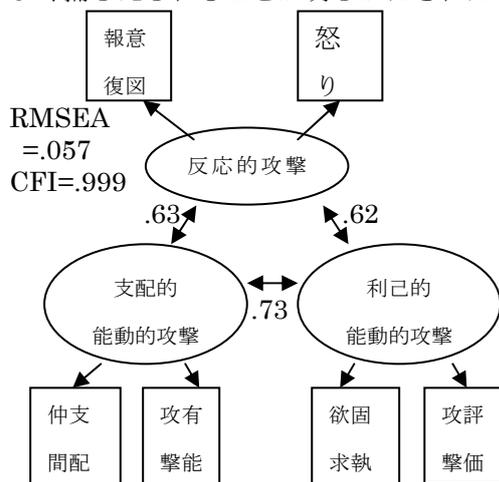


Fig.1 能動的・反応的攻撃性斜交 3 因子モデル
反応的攻撃性の 2 尺度は主に「敵意」「苛立ち」と中程度~高い正の相関を示す一方で, 能動的攻撃性の 4 尺度は「自己中心性」と中程度の正の相関を, 「共感性」とは中程度の負の相関を示すというように, 反応的攻撃性と能動的攻撃性とで, 予測された異なった相関パターンが示され, 並存的妥当性および弁別的妥当性が確認された.

研究 5 では, 粗暴犯罪により少年院に入所した男子生徒 130 名と同じ地方の高校 1~3 年生男子 308 名を対象に, 能動的・反応的攻撃性尺度(高校生用)を実施し, 両群を比較した. その結果, 攻撃肯定評価を除く全ての下位尺度で少年院生徒の方が高く, この尺度の基準関連的妥当性が実証された.

c. 大学生用尺度の作成 研究 6 では, 新たに作成された 71 項目からなる自記式能動的・

反応的攻撃性尺度(大学生用)原版を, 616 名の大学・短期大学生に実施. 項目分析と探索的因子分析の結果, 易怒性, 怒り持続性, 報復意図, 外責的認知, 他者支配欲求, 攻撃有能感, 欲求固執の 7 因子構造であることがわかった. 各下位尺度の信頼性は, 欲求固執と外責的認知で .60, .64 とやや低い, それ以外は .72~.88 と高い信頼性を示した. 易怒性, 怒り持続性, 報復意図, 外責的認知の反応的攻撃性に属する下位尺度は, 主に他の攻撃性尺度の怒り, 敵意関連の尺度と中程度~高い正の相関が見られる一方, 他者支配欲求, 攻

撃有能感、欲求固執の能動的攻撃性に属する下位尺度は一次性サイコパシーや支配性と中程度の正の相関を、共感性とは負の相関を示した。中学生同様大学生の場合も、能動的攻撃性と反応的攻撃性の質的際が明らかにされた。

(2) 青年期における能動的・反応的攻撃性、仲間による挑発場面での社会的情報処理、攻撃行動・主張行動の3者間の関連性の検討：

a. 関係性挑発場面での検討 研究7では、青年が仲間から無視や排除といった関係性攻撃被害を加害者の意図が曖昧な状況で経験するという架空のエピソードが質問紙中で調査対象者(中学1・2年生397名)に提示され、調査対象者が被害者であることを仮定して、そこでの被害者(調査対象者)の感情と社会的情報処理、加害者への応答的行動が質問紙により測定された。同時に、自記式能動的・反応的攻撃性尺度(中学生用)も実施された。分析の結果、関係性挑発場面での被害者生徒の社会的情報処理は、主張肯定評価(主張行動が適切でよい結果を生むという予期)、攻撃肯定結果予期(顕在性攻撃ならびに関係性攻撃が良い結果を生むという予期)、報復的情報処理(加害者との関係維持を望まず、攻撃行動が適切と判断し、怒りの表出を伴う応答的行動を多く想起する)、主張的情報処理(加害者に敵意を認知し、怒りや悲しみの感情が強く、加害行為の理由説明と謝罪を要求する)の4因子構造を示すことがわかった。共分散構造分析の結果、報復意図は直接または報復的情報処理を媒介して報復的攻撃行動を促進すること、攻撃肯定評価は主張肯定評価と主張的情報処理を抑制し、その結果、被害者が主張行動を行うことを抑制すること、怒りは直接的にも間接的にも報復的攻撃につながらず、むしろ主張的情報処理を促進し、主張行動の生起を促すこと、などが明らかにされた。

研究8では研究7と同じ調査が高校1・2年生310名を対象に実施された。因子分析の結果、高校生の場合、社会的情報処理は、怒り・報復的情報処理、主張肯定評価、攻撃肯定結果予期の3因子構造となった。共分散構造分析の結果、高校生でも、報復意図は報復的攻撃行動に直接・間接に強い影響を及ぼしていること、攻撃肯定評価が主張行動の評価を低めて主張行動を抑制することが明らかにされた。研究7・8の結果から、中学生では関係性攻撃被害を経験した生徒がしかえしに攻撃行動をする背景には、怒りではなくむしろ「仕返しをしないと気がすまない」という報復的意図の強さ、そして攻撃行動への肯定的な評価意識の強さが潜んでおり、こうした側面を変えていく指導が更なる攻撃の連鎖を食い止める上で重要である。

b. 道具的挑発場面での検討 研究9では、中学1～3年生303名を対象に、道具的挑発場面(他

者から自己の身体や所有物に危害が加えられた場面)で、被害者の立場におかれたとしたら、どのような社会的情報処理を行い、行動するかを研究8,9と同じ方法で検討した。社会的情報処理は4因子構造で、怒り・報復的情報処理(加害者に敵意を帰属し、怒りを感じ、加害者との関係の維持を望まず、報復を目標とし、怒りを表出した行動レパートリーを想起し、攻撃行動を適切と判断する)、悲しみ・主張的情報処理(悲しみを感じ、加害者からの謝罪への要求が強く、攻撃行動は良い結果をもたらさないと予測する)、主張肯定評価(主張行動は適切でよい結果を生むという予期)、攻撃道具的結果予期(攻撃行動が望ましい結果を生むという予期)となることがわかった。共分散構造分析の結果、①報復意図、仲間支配欲求、攻撃肯定評価の能動的・反応的攻撃性3特性が怒り・報復的情報処理を促進し、主張行動の抑制と報復的攻撃行動の促進をもたらすこと、②能動的攻撃性の攻撃肯定評価は、直接報復的攻撃行動を促進すると同時に、社会的情報処理の主張肯定評価を抑制し、主張行動を抑制することなどが明らかにされた。関係性挑発場面同様、能動的・反応的攻撃性では特に報復意図と攻撃肯定評価が、重要な役割を果たすことが明らかにされた。

(3) 青年期における能動的・反応的攻撃性と様々な心理社会的不適応との関連の検討：

a. 中学生の非行傾向および抑うつとの関連

研究10では、中学1～3年生603名を対象に、能動的・反応的攻撃性と反社会的行動欲求ならびに抑うつとの関連性が検討された。反社会的行動欲求は各種の反社会的行動を行いたいと言う欲求の強さで、因子分析の結果、「暴力・いじめ」、「破壊・窃盗・違反」、「関係性・いじめ」の3因子からなることが明らかになった。共分散構造分析の結果、

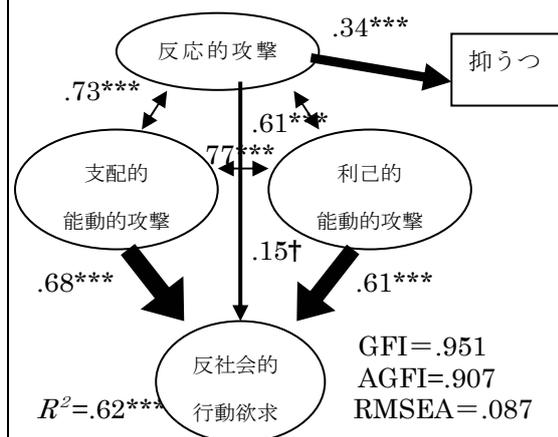


Fig.2 中学生の攻撃性と非行傾向、抑うつとの関連 Fig.2 に示すように、反社会的行動欲求には能動的攻撃性が強い関連を示す一方で、抑うつにはもっぱら反応的攻撃性のみが関連を示した。これは、児童期に能動的攻撃が高かった者が青年期に非行関連暴力に従事する

傾向が強いこと、反応的攻撃が高かったものは、親密な他者への暴力とともに不安障害傾向や引っ込み思案などの内在化問題との関連を示した Brendgen et al.(2001)や Vitaro et al.(1998)と整合する結果である。

研究 11 では、大学生 354 名を対象に、能動的・反応的攻撃性と対人恐怖心性ならびに自己愛性パーソナリティ障害傾向との関連が検討された。重回帰分析の結果、対人恐怖心性については能動的・反応的攻撃性 7 特性のうち 6 特性までが有意な関連を示し、全分散の 32%が攻撃性成分で説明されることが明らかにされた。易怒性($\beta=.29$)、怒り持続性($\beta=.23$)、外責的認知($\beta=.13$)といった反応的攻撃性と他者支配欲求($\beta=.25$)が正の関連を示す一方で、攻撃有能感($\beta=-.32$)、欲求固執($\beta=-.10$)といった 2 つの能動的攻撃性特性とは負の関連を示した。以上の結果から、他者のせいと様々なことがうまくいかないと、少しのことで怒りやすく、いったん怒るといつまでも根に持ちやすい、そして人を思うように支配したいという欲求を強く持つ一方で、他者と利害を争う傾向は希薄で、攻撃行動を行使しても良い結果を得られる自信がない—このように反応的攻撃性が強く、能動的攻撃性が弱いというプロフィールが対人恐怖心性の強い人には見受けられることが示唆された。一方、自己愛性パーソナリティ障害傾向は能動的攻撃性 3 特性のみが有意な正の関連を示した(重決定係数は.16)。攻撃有能感($\beta=.23$)、欲求固執($\beta=.17$)、他者支配欲求($\beta=.10$)。自己の欲求充足のために他者を支配することや葛藤解決において攻撃的な方法を好む傾向は、自己愛を高め、他者とのかかわりの中で尊大に振舞う傾向を助長するものと思われる。

研究 12 では、大学生 354 名を対象に、能動的・反応的攻撃性と境界性パーソナリティ障害傾向との関連を検討した。重回帰分析の結果、MCMI-II で測定される境界性パーソナリティ障害傾向の 23%が能動的・反応的攻撃性によって説明されることが明らかにされた。特に、易怒性($\beta=.31$)、外責的認知($\beta=.22$)、怒り持続性($\beta=.11$)といった反応的攻撃性の特性が BPD 傾向の正の有意な予測子となった。少しのことで怒り易かったり、いったん怒ると持続しやすい傾向が強いほど、また他人のせいで自分に良くないことがおきると考える傾向が強いほど、BPD 傾向が高まることが示唆された。以上、研究 10~12 においては、中学生と大学生で、能動的攻撃性と反応的攻撃性がともに心理社会的不適応やパーソナリティ障害傾向(大学生のみ)と密接な関連を示すことが示された。抑うつや対人恐怖心性、境界性パーソナリティ障害傾向には特に反応的攻撃性の高さが関与し、反社会的行動欲求や自己愛性パーソナリティ障害傾向とは能動的攻撃性の高さが

関与することが示された。

(4)結語

下記の諸点は一連の研究によってもたらされた成果と言えよう。①中学生~大学生までの年齢範囲で、青年の攻撃性を内面から網羅的にとらえる信頼性と妥当性を兼ね備えた攻撃性尺度が新たに開発されたこと、②中学生・高校生が仲間から被害を受けたときに、能動的・反応的攻撃性の中で、特に報復意図の強さと攻撃肯定評価の高さが、社会的情報処理と応答行動に強く関与することが明らかになったこと、③反応的攻撃性は主に抑うつや対人恐怖などの内在化問題および境界性パーソナリティ障害傾向と関与し、能動的攻撃性は非行傾向と自己愛性パーソナリティ障害傾向と関与することが判明したこと、

今後は、中高生の段階での摂食障害傾向や自傷行動、不安障害傾向、大学生・成人段階での反社会的パーソナリティ障害傾向、高校生・大学生でのデート・バイオレンスなどと能動的・反応的攻撃性との関連を検討することが課題である。また、長期に亘る縦断的研究デザインにより、中学生の頃の能動的・反応的攻撃性がどのような筋道で諸種の心理社会的不適応やひいてはパーソナリティ障害傾向をもたらすのか、その発達精神病理学的な変化とそれを促進・抑制する要因を明らかにすることも課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ①濱口佳和・石川満佐育・吉村祥子(印刷中)。
中学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連—2 種類の攻撃性と反社会的行動欲求および抑うつ傾向との関連—教育心理学研究, **57**, (4). (査読有)
- ②桑原千明・濱口佳和(2008)。学校生活満足度類型による中学生の能動的・反応的攻撃性の差の検討 教育相談研究, **46**, 65-73. (査読なし)
- ③濱口佳和(2007)。自記式中学生用反応的攻撃性尺度の構成 カウンセリング研究, **40**, 136-145. (査読有)
- ④濱口佳和(2005)。自記式能動的攻撃性尺度(中学生用)の構成 カウンセリング研究, **38**, 183-194. (査読有)

⑤濱口佳和(2005). 能動的攻撃・反動的
攻撃の概念定義と測定法に関する考察—
青年期における能動的攻撃・反動的攻撃の
個人差測定尺度の開発に向けて— 教育
相談研究, **43**, 27-36. (査読なし)

[学会発表] (計 19 件)

濱口が筆頭発表者のもののみ掲載

1. 濱口佳和 成人用能動的・反動的攻撃性尺
度作成の試み 日本カウンセリング学会
第 41 回大会. 筑波大学附属高等学校. 2008
年 11 月 23 日.
2. 濱口佳和・桑原千明・藤原健志・西澤千
枝美・関根千恵(2008). 中学生の能動
的・反動的攻撃性と道具的挑発場面におけ
る社会的情報処理ならびに応答的行動と
の関連(2)—社会的情報処理媒介モデルの
検討— 日本教育心理学会第 50 回総会.
2008 年 10 月 11 日.
3. 濱口佳和・石川満佐育・江口めぐみ
(2008). 中学生の能動的・反動的攻撃性
と関係性挑発場面における社会的情報処
理ならびに応答的行動との関連(2)—社会
的情報処理媒介モデルの検討— 日本心
理学会第 72 回大会. 北海道大学. 2008 年 9
月 21 日
4. 濱口佳和・江口めぐみ・三鈷泰代・石川
満佐育(2007). 青年の能動的・反動的攻
撃性に関する研究 (5) —高校生の能動的・
反動的攻撃性と攻撃的行動傾向との関連
性の検討— 日本教育心理学会第 49 回総
会. 文教大学. 2007 年 9 月 15 日.
5. 濱口佳和・森丈弓・三浦秀徳(2007). 青
年の能動的・反動的攻撃性に関する研究
(6) 日本犯罪心理学会第 45 回大会, 口頭
発表・一般. ビッグパレット福島. 2007 年 9
月 1 日
6. Hamaguchi, Y (2007). A study of
proactive aggressiveness scales for

adolescents: In case of Japanese sample.
(*Society for Research in Child
Development 2007 Biennial Meeting*
(Boston) Poster session 12, No. 156. 2007 年
3 月 30 日

7. 濱口佳和・三重野祥子・石川満佐育(2005).
中学生の能動的攻撃性・反動的攻撃性と心
理・社会的適応との関連(2)—抑うつ傾
向および非行行動欲求との関連— 日本
教育心理学会第 47 回総会. 北海道浅井学
園大学. 2005 年 9 月 17 日.
8. 濱口佳和・森丈弓・三浦秀徳(2005). 青
年の能動的・反動的攻撃性に関する研究
(1) 日本犯罪心理学会第 43 回大会. 北海
道大学 2005 年 8 月 20 日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱口 佳和 (HAMAGUCHI YOSHIKAZU)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教
授 研究者番号: 20272289

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

森 丈弓 (MORI TAKEMI)
いわき明星大学・人文学部・准教授
研究者番号: 00512154

(4) 研究協力者

三浦 秀徳 置賜学院 法務教官
石川 満佐育 筑波大学附属学校教育局
準研究員
吉村 (三重野) 祥子 地域療育センター
あおば 臨床心理士
江口 めぐみ 筑波大学人間系支援室準
研究員
三鈷 泰代 筑波大学大学院人間総合科
学研究科 大学院生
桑原 千明 同上
藤原 健志 同上
西澤 千枝美 同上
関根 千恵 同上